小・中・都立学校

平　成　5　年　度

教育研究員研究報告書

書　　写

東京都教育委員会

平成５年度　　教育研究員名簿（書写）

書　写	地　区	学校名	氏　名
◎	港	白金小	米良　寿美香
	文京	駕籠町小	宇田川　とし子
○	目黒	第五中	田中　結美
	世田谷	砧小	宮原　賢二
	渋谷	臨川小	渡邉　恵美子
	豊島	駒込小	平松　加代子
	江戸川	春江小	服部　ゆかり
	日野	程久保小	竹内　勝美
	国分寺	第七小	川嵜　英雄
	福生	福生第一中	市川　晃

◎＝世話人　○＝副世話人

担当　教育庁指導部主任指導主事　平野克彦
教育庁指導部中学校教育指導課指導主事　新藤久典

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 1

Ⅱ　研究の構想　1　研究の基本的な考え方 …… 2

2　研究の方法と手順 …… 2

3　研究の全体構想 …… 3

Ⅲ　研究の内容 …… 4

Ⅳ　実践事例〈小学校低学年〉 …… 13

〈小学校中・高学年〉 …… 19

〈中学校〉 …… 21

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題 …… 24

研究主題

「自ら課題を見つけ，主体的に取り組める書写指導法の研究」

Ⅰ　研究主題設定の理由

新しい学習指導要領は，児童・生徒一人一人がこれからの21世紀に主体的に生きるための資質や能力の育成を目指している。それは児童・生徒の側に立つ教育を作り上げることであり自ら進んで考え判断し，行動できる豊かで創造的な資質や能力を身につけさせることである。このため，国語科では，国語に対する関心を高め，国語を尊重する観点から，基礎的，基本的事項を取り上げて指導することを重視している。特に，情報の伝達が様々に変化していく社会の動きに対応するために，目的や意図に応じて適切に表現する能力と相手の立場や考えを的確に理解する能力を養い，思考力や想像力，及び言語感覚を育てることに重点が置かれている。

書写の指導は，国語能力の基礎としての書写力を養い充実させるものとして，国語科の「言語事項」に位置付けられている。書写指導のねらいは，文字を正確に理解し適切に書写する能力を育てるとともに，文字感覚を養い，文字に対する関心を高め文字を尊重する態度を育てることである。さらに，学習指導要領においては，毛筆を使用する書写は，硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導していくことを明示し，毛筆と硬筆の両面から関連させた指導によって書写力の強化を図っている。

今日の児童，生徒の生活においては，映像文化の発達や，ワープロの普及などにより，文字を書く機会が減少している。また，「書けばいい。」「読めればいい。」といった安易な気持ちで「書く」ことを軽視する風潮も見られる。このような実態を踏まえ，書写の学習においては，文字を正しく整え，丁寧に書こうとする意欲や態度を育成し，学習したことを自ら進んで日常生活の中に生かしていこうとする児童・生徒を育てたいと考えた。そのためには，一人一人が自分で考え，解決していこうという課題意識を持って学習に臨むことが大切である。そして，その課題意識を持続させるためには，学習方法を主体的に選択して学習を進めていく必要がある。主体的に取り組めるということは，児童・生徒自らが，「何を」「どのように」学んでいくかということを発見し，進んで学習できることであると考えた。

さらに，学習したことを発展させ，生活の中で実践していくことができるような指導が行われなければならない。つまり，日常の文字を書く機会に学習成果を主体的に運用していこうとする意識が確実に働くようにすることが大切なのである。

このような観点から，本年度は「自ら課題を見つけ，主体的に取り組める書写指導法の研究」という主題を設定し研究を進めることにした。

Ⅱ　研究の構想

1　研究の基本的な考え方

これからの書写学習では，一人一人が自分で考え，解決していこうという課題意識をもって学習に臨むことが一層大切である。本研究では，文字を正しく整え，丁寧に書こうとする意欲や態度を持たせ，自ら進んで学習し，学習したことを日常生活の中に積極的に生かしていこうとする児童・生徒を育てるために，次の２つの方法で研究を進めることにした。

(1)　児童・生徒が自ら課題を見つけるために

自ら課題を見つけ学習に取り組ませるためには，文字の基準を明確にする必要がある。文字の基準がはっきりすると，共通の課題から一人一人が達成しようとする個別の課題も明らかになる。個別の課題を明確に意識させ，学習への意欲や関心を高める指導の工夫が重要である。

(2)　児童・生徒が主体的に取り組めるために

主体的に取り組めるためには，学習課題を自ら解決するという学習過程を工夫する必要がある。また，児童・生徒に学習への意欲や関心をもたせ，持続させるために，書けた時の成就感を味わわせることも大切である。そのための手だてとして，自己評価しながら段階を追って練習できるような用紙の工夫，適切な自己評価・相互評価の工夫，視聴覚機器の活用や教具の工夫を考えた。さらに，学習したことを発展させ，日常生活の中で生かしていけるように発展学習の工夫も重要であると考えた。

2　研究の方法と手順

(1)　研究の組織と方法

本年度の研究員は，小学校低学年６名，中学年１名，高学年１名，中学校２名，計10名の構成である。小学校低学年硬筆班，小・中学校硬毛関連班の２分科会とし，小・中学校の関連を踏まえ，相互に関連を図りながら研究を進めた。

(2)　研究の経過

１学期は，まず，書写指導の様子を報告し合い，研究主題の設定や研究内容の検討，それに基づく研究授業の実践を行った。２学期は，分科会ごとに実態調査を行い仮説を立て，より効果的な指導法を考察し、授業で検証した。全体会における研究授業は次の通りである。

６月11日　小２年「画のつけ方，画の交わり方」
６月22日　小２年「点や画の方向」
７月　６日　中１年「小筆を使用した楷書の筆使いと字形」
９月21日　小３年「はね」
10月　７日　中１年「行書」
10月15日　小１年「とめ，はね，はらい」
10月28日　小２年「画の方向」

3　研究の全体構想図

教育課題・社会の要請
- 心の教育の充実
- 基礎・基本の重視
- 個性教育の重視
- 自己教育力の育成
- 文化と伝統の重視
- 国際理解教育の推進

今日の社会の実態
- 映像文化の発達
- 日本語ワープロの普及

児童・生徒の実態

小・低　文字を書くことが好きで，正しく丁寧に書こうと意欲的に取り組む児童が多い。しかし，姿勢や筆記具の持ち方が正しくない児童が多く，くりかえし気をつけさせないと定着しない。

小・中高　文字を書くことに慣れ，書く速さも増してくるが，正確さがなおざりになり，文字の形が乱れ始める。形の整った正しい文字を選び出すことはできるが，自分では書けない児童が多い。

中　学　短時間で多くの量を書かなければならないため，正しく整った文字を書こうとする意識が薄くなる。書写の時間に学習したことが，日常の書写活動に生かされていないことが多い。

国語教育のねらい
- 国語を正確に理解し目的や意図に応じて適切に表現する能力を育て，言語感覚を養う。

書写教育のねらい
- 生涯にわたって使用する文字の基礎・基本を理解・習得させ，文字を正しく整えて書く能力・態度を養う。

めざす児童・生徒像
- 書写に対する興味・関心の高い児童・生徒
- 自分の課題をもち，主体的に解決できる児童・生徒
- 正しく整った文字を見分け，書く力を持つ児童・生徒
- 書写の時間に習得したことを，日常に生かすことのできる児童・生徒

研究主題

自ら課題を見つけ，主体的に取り組める書写指導法の研究

仮　説

○学習文字の基準がわかれば，自ら課題を見つけることができるであろう。
○自分の課題を自分で発見することができれば，解決への意欲が高まるであろう。
○課題解決への具体的な方法がわかれば，学習意欲が高まるであろう。
○適切な自己評価・相互評価ができれば，主体的に学ぶ態度が育つであろう。
○視聴覚機器の活用や教具の工夫をすれば，課題解決への意欲が持続するであろう。
○発展学習や日常指導の工夫をすれば，学習内容の生活化が図れるであろう。

主題に迫るための指導の工夫

〈小学校低学年〉	〈小学校中・高学年〉	〈中学校〉
・拡大文字や分解文字の提示により文字の基準を明確にとらえさせる工夫。 ・適切な自己評価を可能にするための基準スケールの活用の工夫。 ・興味・関心を持たせ，自分の課題をはっきりさせるための練習用紙の工夫。 ・学習した内容を日常生活に生かしていくための発展学習の工夫。 ・姿勢や持ち方などの日常指導の工夫。	・個々の課題が的確につかめるような課題文字の提示や試し書き用紙の工夫。 ・個々の課題に応じた練習用紙を児童に作成させ，主体的な取り組みを高める工夫。 ・毛筆と硬筆の学習を関連させ，学習した内容の定着を図る工夫。 ・自己評価・相互評価した内容が次の練習に生かせる形成的評価の工夫。 ・学習した内容の応用を進める，発展学習の工夫。	・行書の特徴が日常に生かせることに気づかせ，目的意識を持って学習に取り組ませる工夫。 ・自分の課題を確認しながら学習を進められるようにする工夫。 ・多目的教室を利用した課題別グループ学習により意欲を高める工夫。 ・課題別グループ学習での相互評価の工夫。 ・毛筆から硬筆への学習の発展を容易にする練習用紙の工夫。

Ⅲ　研究内容

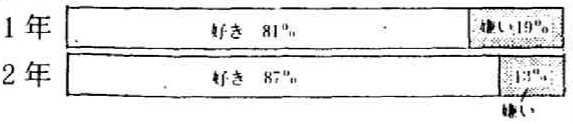
1　小学校低学年（硬筆班）

(1)　実態調査　（都内公立小学校５校，１年生75名　２年生79名対象に７月実施）

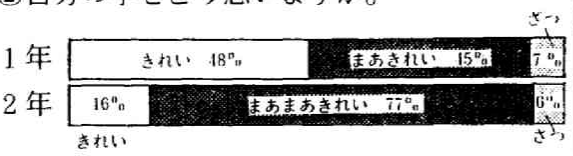
児童の文字に対する意識を把握するため実態調査を実施した。以下はその概要である。

〈調査項目と結果〉

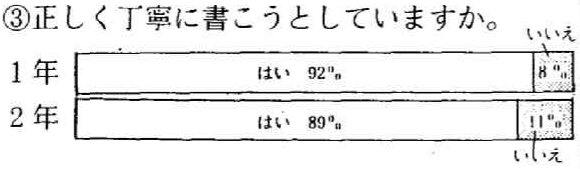
①字を書くことが好きですか。



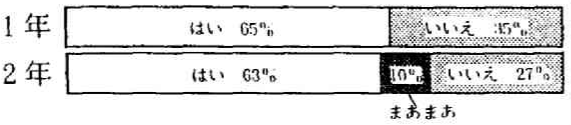
②自分の字をどう思いますか。



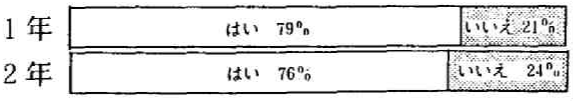
③正しく丁寧に書こうとしていますか。



④正しい姿勢で書いていますか。



⑤鉛筆を正しく持っていますか。



〈考察〉

①「文字を書くことは楽しい」「字が上手になる」といった理由で，好きと答えている児童が多い。反面，思うように書けないため嫌いという児童が２割近くいる。

②ほとんどの児童が自分の字を「きれい」「まあまあきれい」と答えている。しかし２年生で「きれいな字」と答えた児童は少ない。これは，２年生になると児童の文字に対する意識が高まるためと思われる。

③丁寧に書こうという意識はほとんどの児童にある。反面，はじめから字が下手と諦めてしまっている児童もいる。

④半数以上の児童が正しい姿勢で書いていると答えているが，姿勢に対する意識は薄く声かけがないと姿勢は崩れがちである。

⑤正しく持っていると思っている児童が多いが，実態としては，鉛筆を正しく持っている児童は少ない。

〈鉛筆の持ち方の実態〉

（37%）

親指が薬指の上にある。

（21%）

親指が人さし指の中に入っている。

（34%）

親指をまっすぐに伸ばしすぎている。

（8%）

その他の持ち方

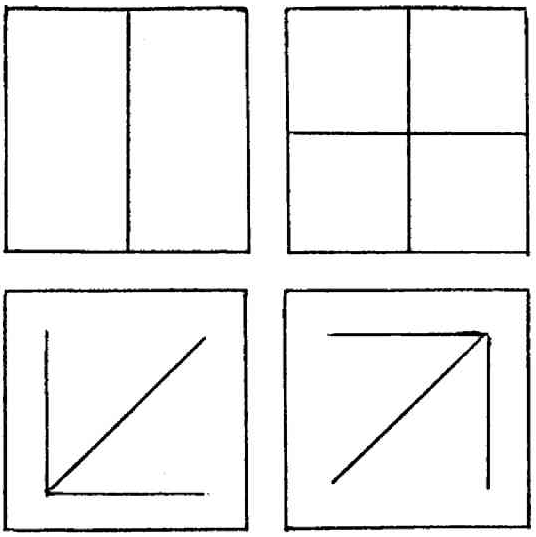
(2) 主題に迫る手立て

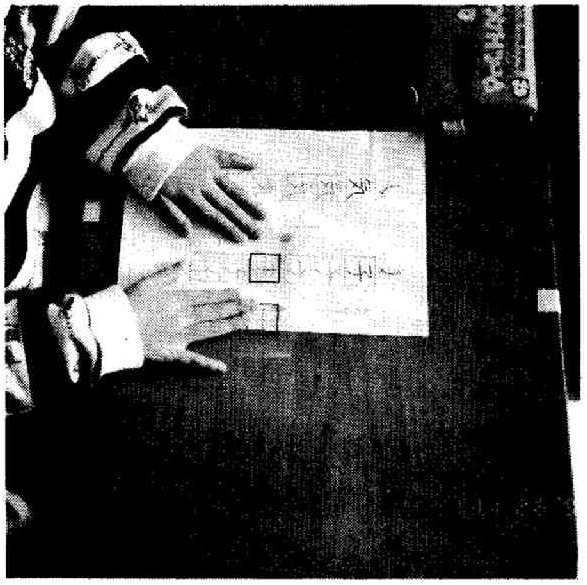
ア．自ら課題を見つけるために

正しく整っている文字の基準を示すことによって，試し書きの文字と比較して，どこが違うかを発見し，自分の課題に気づかせることができる。このことは主体的に学習に取り組み意欲を高め，どのように書いたらよいかを十分に考えさせることができる。

＊基準スケールの活用をはかる

ＴＰシートで下記のような補助線を記したものを作成し，児童一人一人に持たせる。具体物を操作することで一人一人が文字の基準を調べたり，明確にとらえたりできるようにする。また自分の書いた文字に重ねることで，学習の基準との比較が視覚的にでき，自分のめあてがつかみやすい。教師も同様のもので拡大したものを示範用として使うと効果的である。





＊分解文字の活用をはかる

教材文字を拡大コピーし，マグネットシートにはり，点画ごとに切りとって使用する。点画を簡単に移動させることができるので，文字を整えて書くための基本要素を学習するのに適している。

＊試し書きに印をつけ，自分のめあての明確化をはかる

学習の基準に照らして，試し書きの文字で自分がもっとよくしたいと思う部分に赤鉛筆で印をつけさせる。これにより自分のめあてをはっきり持ち児童一人一人がつまずきや書き方のずれを見つけられる。そして，目的意識を持って学習の意欲づけができる。

イ．主体的に取り組めるために

書写力を向上させるために，教師から提示された教材文字を何回も練習するだけでなく，自分の課題を見い出し，書いた文字を自己評価させる学習活動の積み重ねが文字感覚を高めることができる。

＊視聴覚機器の活用をはかる

OHP，VTR，実物投影機などは児童の書いた文字をその場で拡大することによって児童が直接確かめることができる用具として活用し，学習過程に変化をもたせ提示することができ，文字を書くことへの関心や意欲を高めると共に，注意力を集中持続させることができる。また，これらの機器は，文字の合成，分解を行ったりするときに便利であり，硬筆利用のときはフェルトペンでＴＰシートに直接書かせればそのまま写し出すことができる。

＊水書板の活用をはかる

低学年の児童では，小筆を使ったり，指で書いたりすることで「はらい」などを書くときの力のぬき方を学ぶのに適切である。

＊練習用紙の工夫をはかる

教材文字をひと通り練習した後，自分のめあてや練習での自己評価でつまずきの度合いに応じた練習用紙を選択し練習することによって，一斉指導における個の進度がわかり，個別指導を行うことができる。課題ごとの練習用紙や部分練習用紙は色を違えることによって児童に興味関心を持たせると同時に自分の課題をつかませやすい。また練習用紙には自分の広場を設け，進んで練習する意欲を喚起することができると考えた。

＊自己評価，相互評価の工夫をはかる

基準スケールを使って自分の書いた文字を常に評価しながら練習を進めていけるように練習用紙ごとに評価欄を設けておく。それは，自分の学習課題のめあてにそってどの程度課題を達成することができたか，確かめることができる。また，自分の文字のよい点や問題点を確かめ，書写に対する主体的関心を高めることもできた。また，児童が書いたものをＯＨＰなどで提示し相互評価させることにより児童の関心を引き意欲を高めることができる。座席の配置を工夫することによって互いに文字を見合いよい点を見つけたり，直し方を話し合ったりして評価する目を養うこともできる。

＊発展学習を工夫し，学習内容の生活化をはかる

一時間の学習の中で「とらえる，気づく，確かめる，広げる」といった「思考」する場面を重視した指導過程を組み，思考を重視した学習活動の積み重ねが学習内容を他の

文字へ発展させる力となると考えた。学年の漢字一覧表を用い，学習した点画と同じ部分を探すなどの発展学習が日常生活における書写力向上につながると考えた。

(3) 日常的指導（姿勢や用具の持ち方）

児童の書写力を高めるためには，書写の時間に限らず，日常生活の中で文字を書く態度を養っていくことが大切である。特に低学年では，硬筆指導の入門期として，文字を書く時の正しい姿勢や鉛筆の正しい持ち方を指導し，習慣化させることが書写技能を向上させるための重要な指導事項であると考えた。そこで，次のような指導を継続して行い，姿勢，執筆についての基礎的事項の徹底を図った。

ア．姿勢テープ

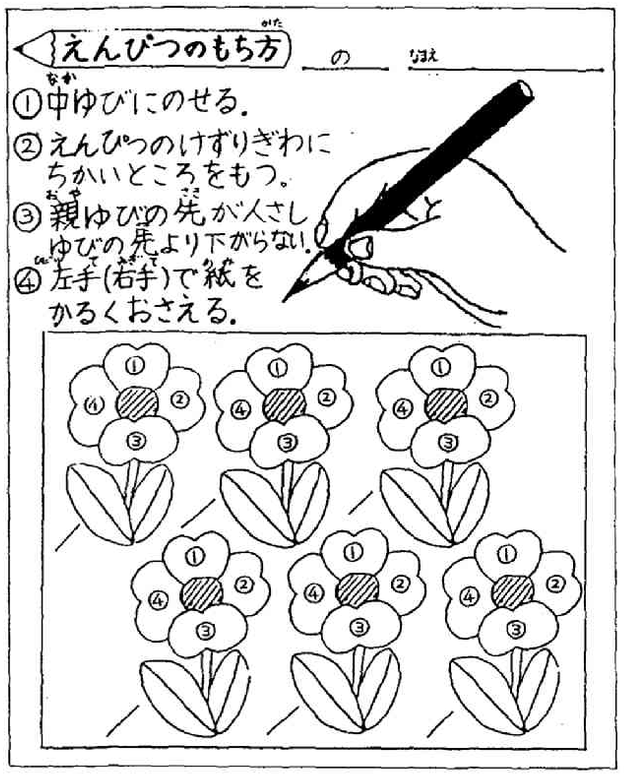
正しい姿勢で文字を書くことができるように，目安となるテープを机に貼っておく。

①のテープ――机の中心に貼る。おへその位置，身体の中心を示す。机と身体は10㎝程離す。

②のテープ――机の中心より６㎝右に貼る。左ききの場合には，６㎝左に貼る。右胸の位置を示す。机上の右手は右胸前に位置させる。

イ．鉛筆の持ち方カード

鉛筆の持ち方は習慣化しやすく，その矯正はなかなか難しい。そこで，正しい鉛筆の持ち方を意識付けていくために，個々に鉛筆の持ち方カードを持たせる。一日の学習の中で，適切な機会を捉え，①～④のめあてを達成することができたかを確認させ，下の図の花びらに色をつけていく。



ウ．言語や動作による表現

低学年の児童にとって，自分で声に出したり，体を動かして表現するということが，理解を深め，学習内容を徹底させることにもなる。

2　小学校中・高学年（硬毛関連指導班）

(1)　児童の実態（都内公立小学校３校３，４，５，６年生　計137名を対象に９月に実施）

ア　調査の目的：　児童の文字実態を①文字の字形を整えて書く能力と②文字感覚（正しい文字を見分ける能力）の２つの側面から調査することによって，文字の字形を整えて書く能力と文字感覚の関連性を明らかにする。

イ　調査の方法：　１，２年生の配当漢字より，「水，学，地，風，雲，道」を課題文字として選定した。これらの６文字について，①文字を整えて書く能力と②文字感覚の両側面から児童の実態を調べた。具体的には，課題１：６つの課題文字を２㎝マスに書かせ，観点別（とめ，はね等の基本点画や文字の組み立てなど）に評価し，得点化する。

課題２：６つの課題文字について，それぞれ，４～５個の文字の中から，基本点画や組み立ての整った文字を１つ選択させた。

ウ　調査の結果：　調査結果は，図１に示す通りである。文字を書く能力に関しては，評価の観点を全て満たしているものを正答者数としている。

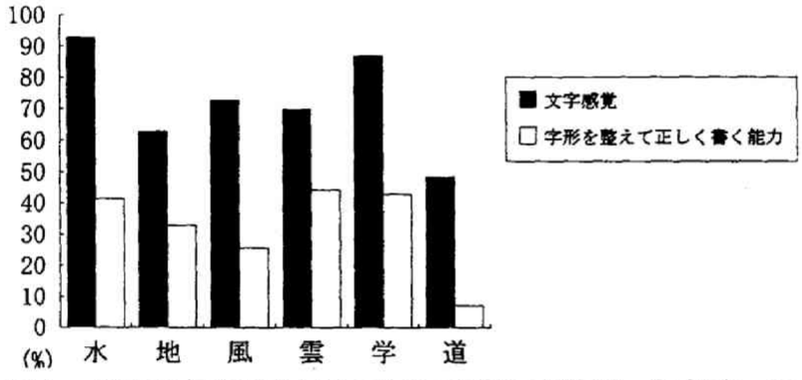


図１　児童の文字を書く能力と文字感覚の関連性（正答率　%）

エ　考察：　調査結果を見てもわかるように，児童は全般に，形の整った正しい文字を見分けることはできる。しかし，形の整った正しい文字を書く能力は文字感覚に伴ってはいない。文字感覚の調査では，字形の崩れた文字の中から正しい文字の選択がなされている。したがって，課題文字と自己の文字とを比較して，その違いや訂正すべき箇所を探し出す力（自己の課題を見つける力）は，育まれていると言えよう。反面，文字を書く場面では，既習事項を全く念頭に置かずに文字を書いている児童が多い。文字感覚をもってはいても，形を整えて書くことはできないという児童の実態が明らかになった。

これらの結果から，自己の課題に応じた練習を繰り返し，字形を整えて書く能力を高め，この能力と文字感覚との能力差を縮めていくことが，必要である。形の整った文字を書けるということは，意欲を高め，児童の日常の書写活動にも大きな影響を及ぼすと考える。

書写学習を通して，字形を整えて書く能力，文字感覚の両側面の育成を図り，確かな書写力を育んでいくことが大切である。

(2) 主題に迫る手だて

ア 自ら課題を見つけるために

日常の学習活動においては学習課題が存在し，それを達成するために個々の児童が学習に取り組んでいくものである。学習課題を個々の児童が自己の能力や特性と照らし合わせ，自分の課題として把握することが，学習効果を上げるためには是非必要なことだと考える。

そのために教師が個々の児童の能力，適性，興味，関心などの実態を理解し，児童が意欲を示し目標を持てるような指導を常に心掛けていかなければならない。

書写の指導においてはただ文字を書かせる練習に終始させるのではなく，書写の学習に対しても自分の課題を意識し課題解決に向けて学習を進めていけるような指導方法を教師は設定していかなければならない。

イ 実態調査の実施

硬毛関連班では児童の書写能力を調査しその結果を分析することによって，具体的な指導法が見つけられると考え実態調査を実施した。（方法，内容については実態調査の項参照）

この調査結果から我々の研究班では，書写の学習において字形の整え方，基本点画の筆使いに多くの児童の課題があると考え，それらのポイントを明らかにし，常にそこに立ち返れるような指導環境が設定できれば，児童が個々の学習課題として把握しやすいのではないかという考えのもとに研究を進めてきた。

ウ 主体的に取り組めるために

児童が書写の学習に主体的に取り組むためには自己の課題を明確に把握することと，課題解決に向けて主体的に取り組める学習法が必要である。

＊ 視聴覚機器や基準スケール，練習用紙の活用を図る。

学習課題を明確にするには児童の視覚に訴えることが効果的である。そのためにＯＨＰを指導の中に積極的に取り入れ，スクリーンに投影することによって文字の基本点画をはっきりさせ，正しい筆使いを理解させた。書写の練習においては自己の課題解決に向けてワークシートに工夫を加え，児童が自己の課題を常に意識しながら学習が進められるようにした。また高学年においては主体的な学習を更に発展させる意味で，自己の課題に基づいて自分のワークシートを作成させることも取り入れた。

学習の成果を自分のものとして身に付けさせるには評価の方法も併せて考えていかなければならない。学習の中で自分の学習の過程をふりかえらせるため，自己評価，相互評価を適宜取り入れた。

(3) 硬毛関連指導の意義

小学校の書写の指導において，３年生から毛筆での指導が導入されるが書写指導の中で毛筆で書くことの意義を押さえた上で指導していくことが必要だと考える。元来，日本語の文字である漢字，平仮名，片仮名のそれぞれの文字は長い間，毛筆で書かれ書体も毛筆の特性を生かしたものが原形となっている。

しかし，現在では生活が便利になりワープロなどの普及により，自分で文字を書く機会が少なくなってきている上に，筆記用具も発達し実際に毛筆を使用する場面が減ってきている現状がある。

このような現状は児童の世界でも同様で，その結果文字を書くことを好まず実際に書く場面においても文字の乱れといわれる筆順，字形の不正確さが現実の場面で問題になってきている。

毛筆で文字を書くことは書写の原点に返ることであり，毛筆の持つ特性（文字の持つ基本点画を明確にできる。)を生かした学習を行うことにより，次のような効果が期待できる。

1　大きくゆっくり書くので筆順が正しくなる。　2　大きく書くことによって字形を意識できる。

3　点や画の一つ一つの形や方向がよくわかる。　4　点や画の付け方や交わり方がよくわかる。

5　文字を大切にして丁寧に書くことができる。　6　文字を書く姿勢がよくなる。

毛筆による書写の学習は習字の作品を仕上げることが目的ではなく，あくまでも硬筆書写力の基礎を養い，書写能力の向上を目指して行わなければならないものである。そのためには毛筆での学習効果が硬筆学習でも十分生かされるように配慮されなければならない。

毛筆学習における教材を精選し，学習活動においては課題を明確にし，学習の成果を日常生活の中で生かすことができる力を，児童に育成することが大切である。

毛筆で文字を書くことにより文字の基本点画や正しい筆使いを再認識し，硬筆で文字を書く際にそれを生かせるようになることが毛筆での書写学習の意義である。上述の１～６の内容を教師がふまえて児童に指導していくことが必要であり，児童も毛筆の書写学習の意義が理解できた時，硬筆での書写学習にも応用する能力が育成できると考える。

本研究では，研究の進め方の中で毛筆での書写学習の意義を理解し，指導効果を上げるために指導法の改善，教材，教具(基準スケール，練習用紙)の開発を推し進めることにより，毛筆書写の学習効果を硬筆書写に転移できる力を児童に育成することがねらいとした。

3　中学校（硬毛関連指導班）

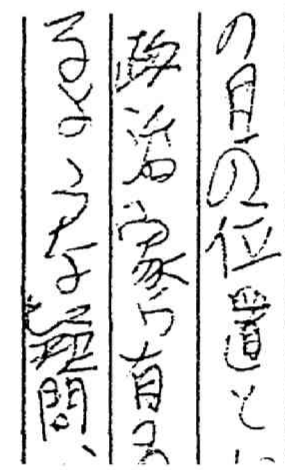
(1)　中学校での実態

中学校になると，文字を短時間に多くの量を書く機会が増えてくる。実際，生徒のノートを見てみると，速く書かないと間に合わないので，自己流の続け方で，小さく，速く書いている場合が多い。しかしその文字は，基本的な点画の続け方が不正確であったり，書き順の間違いから誤った文字を書いたり，文字をくずしすぎて理解ができないものもある。右記の例は，生徒のノートからではあるが，「口」を○マルで書いてしまったり，線の長さが異なったりしているものである。こういう生徒は，もう自分流のクセができつつあるので，早急に指導して行書の基本を理解させる必要がある。

(2)　主題に迫る手立て

ア　自ら課題を見つけるために

普段の生活の中で，正しく，整った文字を書くために，正しい行書を身に付ける事が必要である。そのためには，毛筆での行書の基本の練習が効果がある事を理解させ，個々の学習課題を発見しながら学習し，硬筆にいかせるような書写能力の向上をはかろうと考えた。

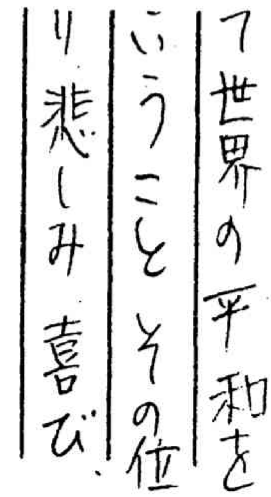


(ア)　学習課題の提示

中学生になると，机上が狭いために教科書がなかなか置きにくく，課題文字を見ないで書いている生徒が多い。そこで，生徒が練習している時間中にはＯＨＰで学習課題を提示したり，板書の説明事項を消さないようにした。そうすることによって生徒がたえず自分の課題を確認しながら学習を進めていくことができた。

(イ)　ＯＨＰを使用し，拡大文字での説明

学習の基準をＴＰシートに直接書き，拡大をして生徒に説明することにより，生徒の関心，意欲の意識づけをした。自己流の書き方を直していくことを強調した。



イ　主体的に取り組めるために

生徒一人一人の課題を解決できるように，個々の課題に応じた練習方法を考えた。書写の学習活動の環境を整えることからはじめ，課題別に練習用紙を選択し，課題解決をはかった。硬筆・毛筆の関連も考え，発展文字の練習から，日常生

活の中の硬筆書写力が向上することができると考えた。

(ア) 多目的教室の利用

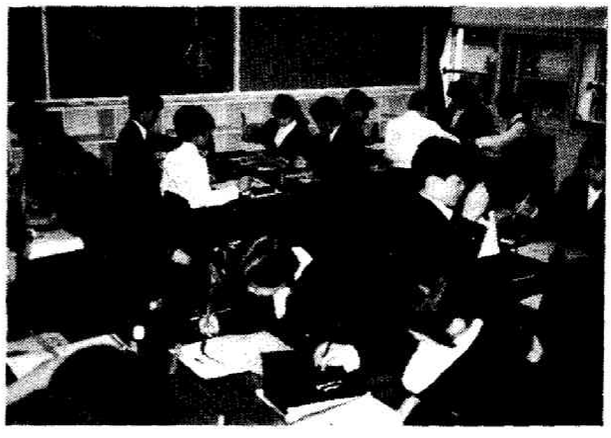
書写の授業は，専用の教室がないのでそれぞれのクラスで学習するのが常である。しかし発想を変え，学級減になってあき教室として利用している多目的教室（大きな机のある理科室，技術室などでもいい）で学習した。この教室は机が大きいので，道具類を置いても一人一人のスペースが広くとれてたいへん学習しやすかった。また，机間があいているので机間指導が容易で，個人指導もしやすくきめの細かい指導ができた。

(イ) 課題別グループ学習

授業時に，生徒が持っている課題は個々によって異なる。一斉授業の中では課題別に授業を進めていく事は難しいものがある。そこで，前書きの広い教室を利用して，課題別グループ学習を実施した。指導者側として，同じ課題の生徒が集まっているので，たいへん指導がしやすかった。また，一つの課題解決ができたあとは，移動をして次の課題へ進むようにした。この学習方法により，課題解決に向けて生徒の意欲を高めることができた。

(ウ) 練習用紙の工夫

日常生活の中で書写学習を生かすという事を考えて，毛筆練習用紙の中に硬筆練習ができるように工夫した。大筆から鉛筆の間に小筆の練習もいれて，より硬筆書きに抵抗がないように配慮した。発展文字学習も練習できるようにし，より日常生活の中の硬筆書写力の向上につながっていくと考えた。



(エ) 評価

課題別グループ学習をから，相互評価が積極的におこなわれるようになった。自己評価は，硬毛の両者を評価することにより，毛筆での筆使いを硬筆に生かすためにどんな課題も持って学習すればいいか理解でき，生徒の次の学習に向けて，意欲を持続することができた。

Ⅳ　実践事例

〈小学校　第１学年〉

1　単元名　とめ・はね・はらい

2　教　材　「小」

3　単元設定の理由

児童は，漢字を書くことに大変興味をもっているが筆順や基本点画については，なかなか正確にできない。漢字に対する興味や関心を示しはじめたこの時期に「とめ」「はね」「はらい」の認識をさせ，正しい書き方を理解させたいと考え本単元を設定した。

4　単元の目標

○画の終わり（とめ・はね・はらい）の違いに気をつけて書くことができる。

○最後まで，ていねいに書くことができる。

5　児童の実態

どの子も新しい漢字の習得には，大変意欲的である。しかし，書かれた文字を見ると点画の長短や方向が定まっていなかったり，とめ・はね・はらいができていなかったりすることが多い。また，指先の動きが十分でないため，自分の思い通りに書けない児童も多い。

6　指導計画（２時間扱い）

第１時　画の終筆部分の違いに気づき，漢字を書く。（本時）

第２時　画の終筆部分の違いに注意して，漢字や語句を書く。

7　本時の指導

(1)　目標

○とめ・はね・はらいに気をつけて「小」を書くことができる。

○最後までていねいに書こうとすることができる。

終筆部分の実態

「とめ」

・はらっている

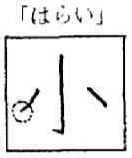
・とめが弱い

「はね」

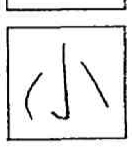
・とめている

・はねの先がとめ

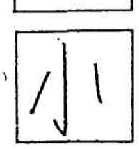
「はらい」



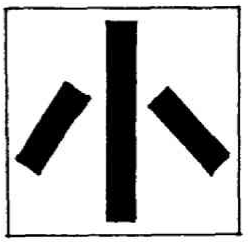
・はらいの方向



・とめている



(2) 展開

	学　習　活　動	指導上の留意点	主題との関連
とらえる	1．教材文字を知る。「小」 2．試し書きをする。 3．学習のめあてをつかむ。	・空書により筆順を確かめてから試し書きをさせる。	
	かくの　おわりの　ちがいに　気を　つけよう。		
	①画とは何か，画の終わりとは，どこか考える。 ②正しい「小」を作る。 4．学習の基準を知る。 5．自分のめあてをもつ。 ・自分が注意して書こうとするところに印をつける。	・三画とも終筆が違っていることに気づかせる。 ・終筆の正しいものを見つけさせる。 ・終筆の書き方を示す。 と　め…とめる。 は　ね…一度とめて左上の方へはねる。 はらい…次第に力をぬいてはらう。 ・学習の基準と試し書きを比べ自分のめあてをもたせる。	拡大文字を提示することで教材を視覚的にとらえさせ，興味をもたせる。また，終筆部分に着目させる。 分解文字
確かめる	6．自分のめあてに沿って練習用紙を選び練習する。 7．自己評価をする。 8．まとめ書きをする。 9．相互評価をする。 10．自己評価をする。	・終筆部分練習をさせる。 ・時間に余裕のある児童には三枚練習してよいことを伝える。 ・部分練習したところが基準に沿って書けたか評価させる。 ・もう一度めあてを確かめてからまとめ書きをさせる。 ・友だちの良くなったところを見つけさせる。 ・試し書きと比べて良くなったところを見つけさせる。	とめをピンク，はねを黄緑，はらいを水色の用紙とすることで興味をもたせると同時に自分のめあてをはっきりさせる。 相互評価をするためＯＨＰを用いる。
広げる	11．発展学習をする。 「六」「八」「竹」の漢字から，とめ・はね・はらいを見つける。 12．本時のまとめをする。	・画の終わりに注意して見つけさせる。 ・字を書くとき約束を守って書くと良いことを知らせる。	既習文字の中から，とめ・はね・はらいを見つけることにより，日常生活に生かしていく態度を育てる。

(3) 評価

○とめ・はね・はらいに気をつけて「小」を書くことができたか。

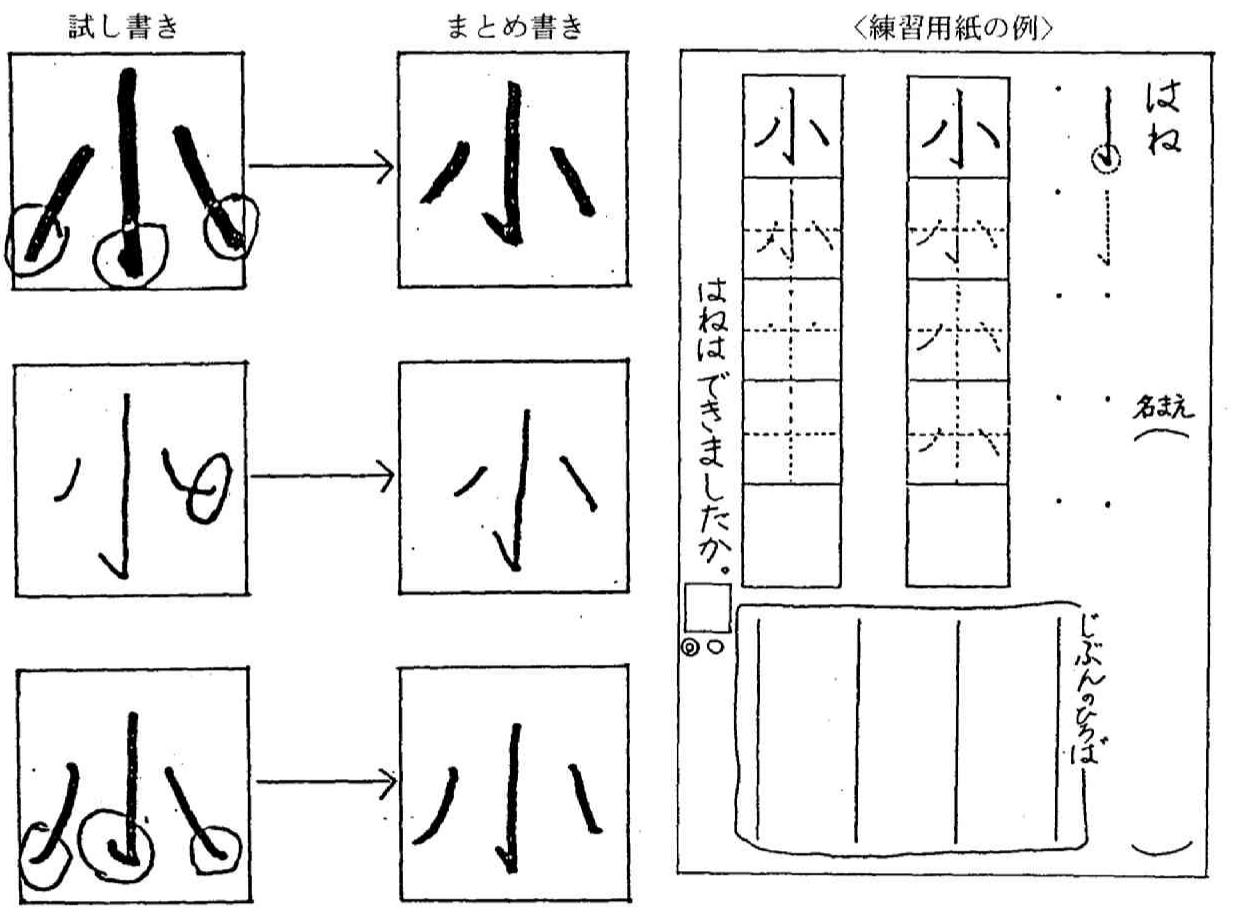
○最後までていねいに書こうとしていたか。

8 考 察

終筆を意識させるために終筆部分の異なった分解文字を提示し，正しいものを選ばせたのは学習の基準をはっきりさせるのに効果的であった。

練習用紙をとめ(ピンク)・はね(黄緑)・はらい（水色）と，色分けしたのは，児童にとって視覚的にとらえやすかった。また，意欲も持続できた。

実態調査を基に，個に応じた指導法について今後考えていく必要がある。



本時の練習により，児童は終筆部分を意識しながら書くことができた。

とめ・はね・はらいに分けて練習することにより，個別の課題が明確になった。また，意欲や関心が高まり主体的に学習することができた。

〈小学校　第２学年〉

1　単元名　画の方こう

2　教　材　「日・口・子・気」

3　単元設定の理由

児童の文字を見ると，点画の方向の不適切さから，字形に乱れが生じている。そこで，第２学年の指導事項の１つでもある「点画の方向」に注意することが，正しい文字を書くのに大切な要素であることを理解させたいと考え，本単元を設定した。

4　単元の目標

○点画の送筆・終筆の方向に注意して，漢字を書くことができる。

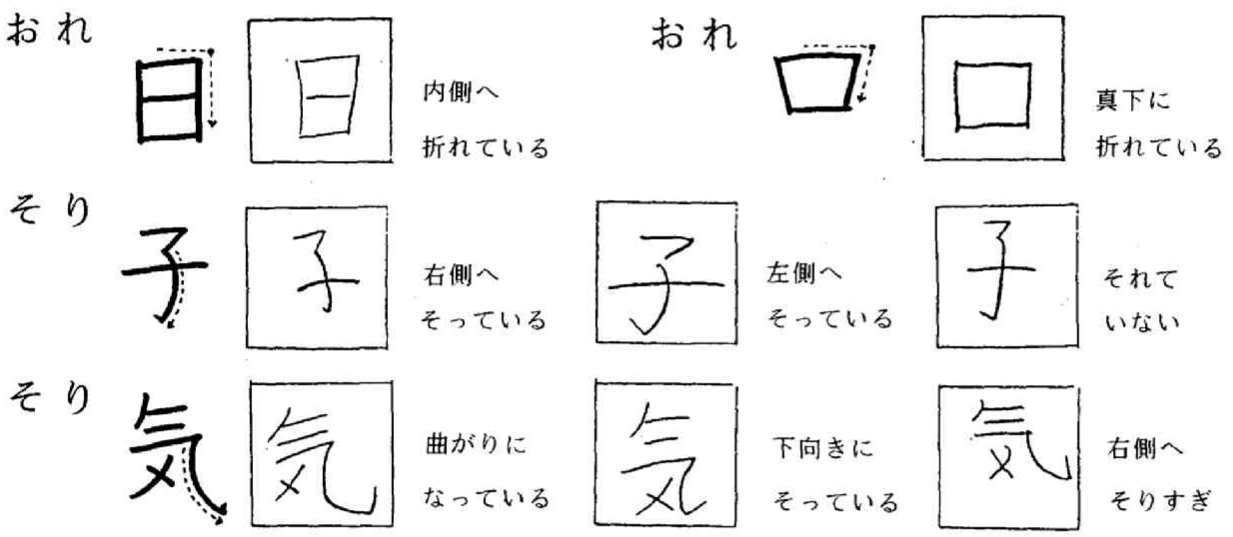
○点画の方向に注意して，文章に書くことができる。

○最後まで，ていねいに書くことができる。

5　児童の実態

筆順や止め・はね・払いの終筆などの基本点画の書き方については，だいたいできている。しかし，方向といった文字の細部まで意識している児童は少ない。折れや払いの方向が自己流だったり，そりと曲がりを混同したりしている。また，同じ点画でも，文字により方向の違いがあることにもあまり気づいていない。

○「おれ」と「そり」の実態



6　指導計画（４時間扱い）

第１時　送筆の折れやそりの方向に注意して，漢字を書く。（本時）

第２時　送筆の曲がりや終筆の払いの方向に注意して，漢字を書く。

第３時　点画の方向の違いに注意する漢字の書き方を理解し，文章の中で書く。

第４時　点画の方向に注意して，文字を正しく書く。

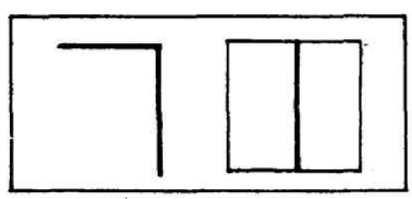
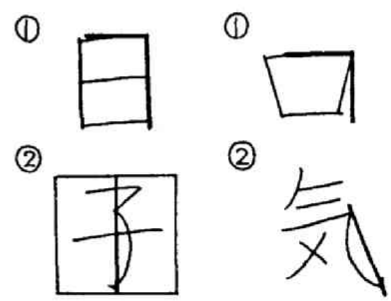
7　本時の指導

(1)　目標

○送筆の折れやそりの方向に注意して，漢字を書くことができる。

○最後まで，ていねいに書こうとすることができる。

(2)　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点	主題との関連
とらえる	1．教材文字を知る。 2．試し書きをする。 3．学習のめあてをつかむ。	・空書により筆順を確かめさせる。	
	おれやそりの方向に気をつけて書きましょう。		
	・「おれ，そり，方向」について考える。 4．学習の基準を知る。 ・折れの方向，そりの方向を考える。 ・教材文字に基準スケールを当て，方向の違いを確かめる。 	・「おれ，そり」は，どの部分か拡大文字に印をつける。 ・文字により，折れやそりの方向が違うことに気づかせる。 ・基準スケールの使い方と文字の基準を理解させる。 	・基準スケール・拡大スケールで学習の基準を視覚的にとらえさせる。 ・拡大分解文字で基準の理解を深めさせる。
	・そりの方向の不適切な文字を見つける。 5．自分のめあてをもつ。 ・自分が注意して書こうとする部分について，試し書きに印をつける。	・自分の試し書きに基準スケールを当てて基準と違うところを見つけさせる。	・自分のめあてを明確にさせ，意欲や関心を高める。

	学　習　活　動	指導上の留意点	主題との関連
確かめる	6．練習をする ・自分のめあてに合った練習用紙を選ぶ。 7．まとめ書きをする。 8．相互評価をする。 9．自己評価をする。	・自分のペースで，ていねいに書かせる。 ・基準に沿って書けたかどうか，練習用紙ごとに評価させる。 ・もう一度めあてを確認させる。 ・友達の良くなったところを見つけさせる。 ・試し書きと比べて良くなったところを見つけさせる。	・練習用紙を色別にすることで興味をもたせ，めあてをはっきりさせる ・ＯＨＣの活用により，関心を高める。
広げる	10．発展学習をする。 ・同じ方向の折れやそりのある漢字の仲間を集める。 11．本時のまとめをする。	・学習漢字一覧表から探させ，画の方向に注意して書かせる。 ・他の文字や日常の書く活動に，本時の学習を生かすよう促す。	・他の文字へ関心を広げさせる。

(3)　評価

○送筆の折れやそりの方向に注意して，漢字を書くことができたか。

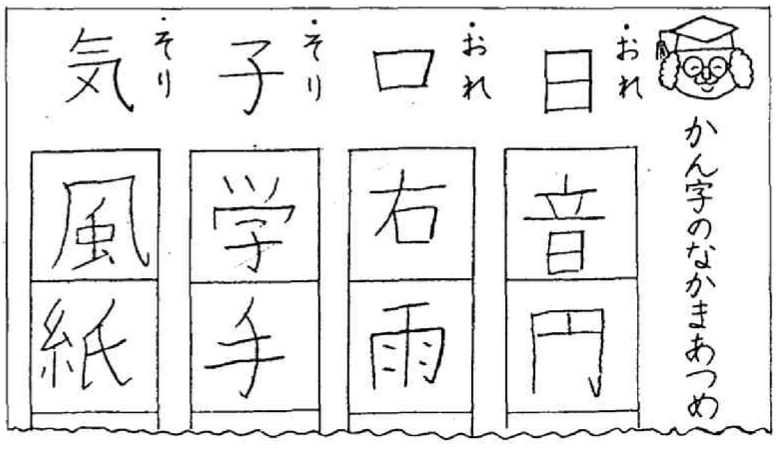
○最後まで，ていねいに書こうとすることができたか。

8　考　察

拡大文字や拡大基準スケール，分解文字を提示したことで，文字の基準が明確になり，児童が視覚的にとらえやすかった。また，基準スケールも児童一人一人が操作できたので，めあてを見つけたり，評価をしたりする際に役立っていた。

今後，文字の基準を的確につかませるための補助線のつけ方については，さらに工夫していく必要がある。

本時の練習を生かし，発展学習でも児童は画の方向に注意して，漢字を見つけ書くことができた。



〈小学校　第３学年〉

1　単元名　「はね」

2　教　材　「小」

3　単元の目標

「はね」の方向に注意しながら，文字を正しくていねいに書くことができる。

4　単元設定の理由及び児童の実態

３年生になって児童は文字を書くことに慣れて書く速さも増してきた。しかし書く速さが増すに従い字形を正しくとらえてていねいに書く意識が段々薄れ不正確になってきている。これは点，画，払い，止めなど，文字の基本点画や組み立てを考えて書くという意識が無くなってきているからだと思われる。事実児童の書いた文字を見ると文字の書き方を学習し始めた１・２年生の頃に比べると，少しずつ乱れ始めるとともに丸文字，くせ字などが見られるようになってきた。

そこで文字の基本点画の一つである「はね」を毛筆で書写し，その意識と態度を高めながら字形を正しくとらえて書く能力を養い，硬筆でも応用できる態度を育てるために本単元を設定した。

5　指導計画〈２時間扱い〉

第１時　「はね」の筆使い

第２時　硬筆での応用

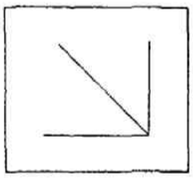
6　本時の学習活動の展開

(1)　本時の目標

・毛筆で学習したことを生かし，はねの方向や力の入れ方，抜き方に気をつけて書くことができる。

・「はね」を含む文字を見つけ，学習したことを生かして書くことができる。

(2) 展開

	学　習　活　動	指導上の留意点	主題との関連
導入	・本時の学習のめあてをつかむ。 ・自分のまとめ書き「小」を振り返り本時の学習を予想する。	・本時の学習内容を予想させ具体的に目標を把握させる。 ・自分のまとめ書きの中でどの部分にはねが使われているかをつかませ，力の入れ方抜き方はねる方向を考えさせる。	・自己の課題を見つける。
展開	・ＯＨＰシートにマジックで「小」を書く  基準スケール ・自己評価をする。 ・まとめ書きをする。	・ＯＨＰシートに書く時に本時の目標を意識して書かせる。 ・ＯＨＰに投影し上に基準スケールをのせ，はねる方向，角度を理解させるとともに力の入れ方抜き方を発見させる。 ・本時の目標…自己の課題を意識して硬筆で練習用紙に練習させる。 ・基準スケールを使って自己評価させる。 ・教科書の中からはねのある文字を探し練習用紙に書かせる。	・主体的に取り組む。
まとめ	・学習のまとめをする。	・はねのある文字を使って文章を考え発表させる。	・日常性への転移

7　評　価

・「はね」の書き方が理解でき字形を硬筆で正しく書けたか。

・「はね」を含む文字を見つけ，学習したことを生かして書くことができた。

8　考　察

書写指導を通して文字を書く際に基本点画や組み立てに注意を払うようになってきた。書写の時間だけでなく，他の文字を書く場面でも応用するなどしてノートの文字も丁寧に書くようになってきている。今後の課題としては課題意識の芽生えは可能になってきているが，解決に向けて意識や意欲を持続させていくために，教師の支援の方法，教材の与え方などについて研究を進めていく必要があると思われる。

〈中学校〉

1　単元名　「行書」（第１学年）

2　教　材　「平和」

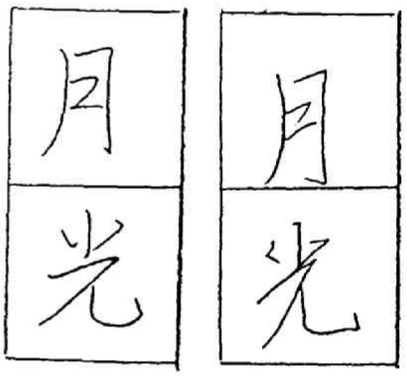
3　単元の目標

○行書の特徴を生かし，点画の連続に注意して書くことができる。

4　生徒の実態

行書を学習するのは「月光」に続き２回目であるが，行書の特徴をある程度理解していても，その筆使いを身につけるところまでは至っていない。しかし，硬筆のまとめ書きを見ると，横画の連続，点の連続など，部分的には行書の筆使いを生かしつつあるといえる。

本時の教材については，「平」の１～４画目の連続，のぎ偏の省略，「口」部の点画の連続といった行書の特徴を日常の文字に生かしている生徒はほとんどいない。試し書きである程度意識して書いてみても，思うように筆が運ばないのが実態である。行書の筆使いを身につけ，さらに日常の書写に生かしていくためには，毛筆による基本的な筆使いの練習を積み重ねると同時に，常に硬筆でも練習させていくことが必要である。



5　単元設定の理由

中学校で行書を学習する目的は，日常的に文字を正しく整え，速く書くことができるようにその筆使いを身につけることである。従って，毛筆での行書を学習する当初から，生徒に硬毛の関連を明確に意識させながら指導することが必要であると考えた。そのためには，毛筆中心，硬筆学習は「つけ足し」というような授業展開ではなく，練習用紙を工夫することにより，硬毛の練習を繰り返すことが効果的ではないかと考えた。そして，評価の対象も，硬筆文字に重点をおかせるように心がけた。毛筆での練習によって身につけた筆使い，字形の整え方が，日常生活で書く文字にも生かされることを，生徒が実感しながら学習を進めていけるようにと考え，本単元を設定した。

6　指導計画

第１時　「平」「和」の点画の連続，のぎ偏の部分の省略のしかたとその筆使いを理解する。

第２時　字形の整え方を知り，硬筆によるまとめ書きをする。

7　本時の指導

(1)　目標　○「平」「和」の点画の連続，のぎ偏の省略のしかたに気をつけて書く。

(2) 展開

	学　習　活　動	指導上の留意点	主題との関連
導入	1．日常文字の実態を知る。 ・各自のノートから「平和」を抜き出して見る。 2．学習のめあてをつかむ。 ア「平」の点画の連続 イ のぎ偏の省略 ウ「口」の部の点画の連続 3．学習の基準を知る。 ・示範を見る。	・文字を分類し，各々の筆使いの誤り，字形の乱れをわかりやすく指摘する。 ・「平」の第1～4画の連続，のぎ偏の省略の部分の方向，「口」部の折れの筆使いに注意させる。（拡大文字） ・硬毛両方で示範する。（OHP）	・個々の実態をつかませ，課題解決への意欲を持たせる。 ・硬・毛の文字の基準を視覚的に示し，その関連を意識づける。
展開	4．練習をする。 ・練習用紙を用い，硬毛交互に練習する。 ・自己評価をする。 5．グループに分かれて練習をする。 ・学習のめあてのいずれかを集中的に練習する。 ・相互評価をする。	・ひと筆で，連続して書くように指導しながら，繰り返し練習させる。 ・生徒の筆使いの例を示しながらア～ウについて評価させ，グループ分けを準備させる。 ・場所を移動し，各々のグループの生徒のそばで示範し，個々に指導する。 ・グループ内で評価させる。	・毛筆の筆使いが硬筆に生かされているかを常に意識させる。 ・特に硬筆文字に注目させ，生徒自身にグループを選ばせる。 ・硬筆では，練習用紙のマスを自由に使わせ，教材以外で同じ筆使いをする別の文字も練習させる。
まとめ	6．まとめ書きをする。 7．自己評価をする。 ・学習のめあてにそった項目で評価する。	・毛筆・硬筆の両方で書かせる。 ・学習課題が解決できたかを確かめさせる。	・硬・毛両方を評価し，次回へ向けて新たな課題を発見させ，学習意欲を持続させる。

(3) 評価

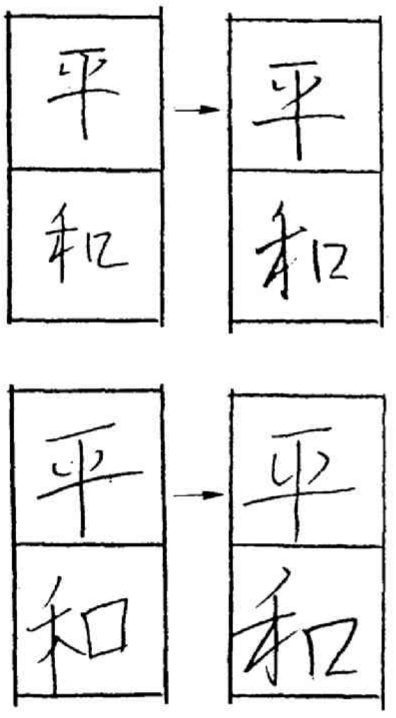
○点画の連続，省略のしかたとその筆使いを理解し，気をつけて書くことができたか。

8　考　察

毛筆での行書の筆使いを硬筆に生かすために用いた練習用紙は，生徒にとって大変使いやすく，大筆から鉛筆に持ちかえる方法も抵抗なく行われた。硬筆用のマスを使って発展文字を意欲的に練習する生徒も多く，書写の授業で学んだことを日常の書写へと無理なくつなげる上で有効であった。また，広い机を使用してのグループ学習は，指導が効率的であると同時に，指示の有無にかかわらず，常に相互評価の場となることが確かめられた。それにより，生徒は課題をとらえなおし，学習意欲を持続させることができた。反面，練習時に集中力をなくす生徒も若干みられた。

今後は，練習用紙を活用する場合の筆記具について，硬毛の関連を考えて更に検討する必要がある。

試し書き　　まとめ書き



練習用紙

V　研究のまとめと今後の課題

今年度は，研究主題「自ら課題を見つけ，主体的に取り組める書写指導法の研究」を設定した最初の年である。まず各自の課題を明確に意識させること，そして課題解決に向けての学習意欲を持続させるような指導法を追究し，次のような成果をあげた。

(1)　練習用紙を課題別に色分けし，学習させることにより，意欲や関心が高まり，個別の課題が明確になった。

(2)　児童が自分のめあてに沿って練習用紙を選択することにより，主体的に取り組むことができるようになった。

(3)　基準スケールを用いることにより，文字の基準を体験的につかむことができた。また，自己評価や発展学習をする時にも，主体的に学習することができた。

(4)　発展学習を取り入れることにより，文字に対する意識が高まった。

(5)　文字の基準を方眼上に示すことで，文字の外形や点画の方向等にも注意を向けて自己の課題を発見し，練習に取り組めるようになった。

(6)　自己の課題に応じた練習用紙作成の過程で，児童の主体性が発揮された。完成した練習用紙を用いての学習で，文字を書くことへの興味，関心も増し，意欲的な学習ができた。

(7)　多目的教室でのグループ学習は，生徒たちの活発な相互評価の場となり，新たな課題を発見するとともに，意欲を持続させることができた。

(8)　練習用紙の工夫により，硬毛両者の練習が効果的に行われ，日常の硬筆書写にもつながる活用ができた。

今後の課題としては，以下のことがあげられる。

(1)　低学年では，練習の段階で自己評価，高学年・中学校では相互評価を取り入れてきた。次の練習に効果的に生かされるような評価の工夫をしていく必要がある。

(2)　個別の課題を明確化するために研究を進めてきた。さらに，実態調査をもとに，焦点を絞って児童・生徒を支援していくための，個に応じた指導法等について考える必要がある。

(3)　毛筆での学習を日常書写につなげる場合，どのような筆記具を用いるのが効果的であるかを探っていく必要がある。

(4)　児童・生徒が常に課題を再認識できるように，視聴覚機器等を用いての学習基準の提示方法を，さらに工夫する必要がある。

(5)　硬毛の関連を念頭において，小・中一貫した教材の系統的配別を考えていく必要がある。